

「となりびと」

～かわいそうに思い イエス様の目になった人～

ルカ10章30～35節

隣人とは誰か

良きサマリヤ人のたとは有名なので、ご存じの方も多と思います。これは律法の専門家がイエス様を試そうとして質問したことに対する答えとして語られた例え話です。律法の専門家は「何をしたら永遠のいのちを自分のものとして受けることができるでしょうか。」と質問しました。イエス様は「律法にはどう書いてありますか。」と聞き返されました。すると律法の専門家は「心を尽くし、思いを尽くし、力を尽くし、知性を尽くして、貴方の神である主を愛せよ」、また「あなたの隣人をあなた自身のように愛せよ」と書いてあることを答えました。イエス様が「それを実行しなさい。」と言われると彼は自分の正しさを示そうとして「わたしの隣人とは誰のことですか。」と質問しました。この質問に対するイエス様の答えが「良きサマリヤ人」の例え話です。サマリヤ人は当時イスラエルの人々から差別されていました。彼らが混血だったからです。しかし、この箇所ではイスラエルから差別されていたサマリヤ人が強盗に襲われた人を助け、しかも宿屋の主人にお金を渡して看病するように頼んでいます。祭司とレビ人が助けないうで通り過ぎてしまったことは対照的です。祭司とレビ人はどうして強盗に襲われた人を助けなかったのでしょうか？祭司やレビ人には血に近づいては行けないという決まりがあったからです。困っている人を助けるという良心よりも、自分達の決まりのほうの方が大切になっていたので、怪我をした人を助けなくなってしまいました。本当は誰の心にも良心があります。困っている人を助けようと思う優しい心を持っています。それをさせなくするものがあります。

親は見せることでしか子どもたちを教育できない

親は子どもたちに見せることでしか教育ができません。子供を叱ることは大事なことです、叱る方法が間違っているなら子どもたちはそこから学ぶことができません。親ができていないことを子供にやれと命令しても子供には通じません。夫婦喧嘩をしながら子供に「仲良くしなさい」と言っても、子どもたちは仲良くすることを学んでいないのでできません。パリサイ人がどうしてパリサイ人になるのか、私たちはよく考えなければいけません。ルカ7章29節～35節では民や取税人はヨハネの教えを聞いて素直にバプテスマを受けたが、パリサイ人たちはヨハネからバプテスマを受けなくて、「悪霊に憑かれている」と言っていました。また、イエス様に対しては「食いしん坊の大酒飲み、取税人や罪人の仲間だ」と言って、イエス様を受け入れませんでした。パリサイ人たちの親は何かあるとすぐに「悪霊に憑かれている」と言っていた言葉があります。親がやってきたことをそのまま継承してしまいます。私達も同じことを子どもたちにやっています。良い伝承なら構いませんが、大抵は良くない事を継承しています。このようにして私たちは後の世代に悪い価値観を残していつていきます。子供を叱るとき、「いい加減しろ」、「何回同じことを言わせるんだ」、「なぜ分からないんだ」、そのような言い方をしていませんか。その言葉を自分に向けなければいけません。親が自らの弱さや戦っている姿を見せなければ、子供はその問題と戦うことはできません。また、親が子供の人生を決める行為も危険です。神様はあなたの人生を「こうしろ」を命令したことがあったでしょうか。そのようなことは聖書には書いていません。聖書にはやってはならないことが書かれてあります。「神を愛し隣人を愛せ」と書いていた以外にははならないことを書いています。してはならないことを教えるのが親の仕事です。それが神様のされたことです。しかし私たちは子供にして良いことを教えようとして。子どもたちは自らが決断して行動するのではなく、親が決めたことを強制されるようになります。神様から預かった子どもに伝える仕事、これは私達クリスチャンの大切な使命です。人の心を変えることができるのは人と人との心関係だけです。怒ることで人は変わりません。叱ることは必要ですが、その後でその人を許すことの中で人は変わっていくことができます。許すプログラムこそがイエス様がやった十字架の御業です。悪いことをした人、失敗をした人が沢山いましたが、「あなたがした失敗はこのような結果を招くのだ」ということを教えるためにイエス様は十字架にかけられました。鉛の入ったムチで何度も彼は打たれました。なぜ

そのようなことを受け入れられたのでしょうか。「あなたが発する言葉のムチはわたしの体をこのように傷つけるものなのだ」ということを伝えるためでした。「あなたが負っている重荷をわたしが背負う。だからあなたは重荷を下ろして歩けるのです」と伝えるためにゴルゴダへの道の人々に嘲られ、ムチに打たれ、のぼってしまいました。そしてしてもいけない罪のために十字架にかかけられました。それは私達が幼いときから意味もわからないまま謝ることを強要されてきたからです。

子どもと関わっていますか？

私達よりも弱い者が子どもたちです。それが隣人なのだと聖書は伝えてあります。隣人は誰でしょう。私達の隣人は私たちに都合よく動いてくれる人ではありません。良いことを伝えてくれる人が隣人ではありません。厄介で見下すような相手、邪魔だと思える人です。こんな人いなければよいのにと思えるのが隣人です。サマリヤ人は強盗に襲われた人のために、2デナリを宿屋の主人に渡しました。当時の2日分の賃金に当たります。自分のために使うのなら躊躇しないと思いますが、見ず知らずの人に使うと思うと躊躇するのではないのでしょうか。でも、サマリヤ人は自分たちが差別されて痛みを知っていたので、強盗に襲われた人の痛みを理解することができました。だからお金をおいて行くことができました。子どもたちに教えることなどありません。教えるのではなく見せるしかありません。なぜなら、イエス・キリストが生き方を見せたからです。彼は愛とはどのようなものかを見せるために来られました。教会は見せるところです。教えるところではありません。

心が分かる人

子どもたちを心が分かる人に育てなければいけません。関わる私達が心のわかる人になっていなければ子どもたちは心がわかる人にはなりません。だからイエス・キリストは4つの福音書を通してどうやって生きたかをあれだけ細かく残しました。だから聖書を読んでイエス・キリストの生き方を感じてください。あなたがイエス様を感じない限り、子どもたちに心を残すことはできません。あなたの心をイエス様と取り替えないといけません。私達の心のままで、子どもたちが心がわかる人に育てることができません。分かってももらえないと分かりません。まずあなたが神様の前に出て分かってももらいましょう。そうすると分かってももらったあなたは子どもたちの心分かってもあげられるようになります。

怒りではなく会話

人とコミュニケーションを取るためには会話をする必要があります。口論することでは傷つけ合うだけで何にもなりません。私たちはやり方を変えないといけません。子どもとも会話をしてください。大人だからと言って子どもに対して権限を持っているわけではありません。親に権力を振りかざされて育つと、権力の嫌いな人に育ちます。甘くしろと言っているわけではありません。厳しく接する必要があります。だた、ストレスで追わせないようにしなければいけません。神様は厳しい方です。「さがれ！サタン」とペテロに言いました。でも「出て行け」とは言われませんでした。ペテロと関わって食事をして終わります。許されたとわかったのでペテロはまたついていきました。会話することで心が分かり合えます。

行為ではなく理由を見る

子どもたちの行為を叱る人が多すぎます。なぜその行為をするに至ったのかわからないといけません。子どもは親にされたことをします。今まで親から受け継いだ良くない事を断ち切る決断をしましょう。決断すれば変わることが出来ます。変わったあなたが人と向き合えば、その人は変わっていきます。一人の人が関わるのが人を変える最大の方法です。私達が子どもたちに見せなければいけないのは人生です。あなたがどう生まれてどう生きたかを子どもたちに伝えてほしいのです。イエス・キリストは33年間の公生涯を生きて伝えました。イエス・キリストに従う私達の生き方を子どもたちに見せていきましょう。

(要約者:日名 洋)

(11月6日)